

情操教育によるカンボジア教育支援

美術教育を軸に据えた教員トレーニングと題材開発のための調査と検討

鈴木光男*)¹⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学

1. 目的

カンボジアの幼児・初等教育段階における美術教育拡充・発展を目指し、2012-2013年に認定 NPO 法人学校をつくる会(JAPAN TEAM OF YOUNG HUMAN POWER:以下 JHP)が実施した美術教育研修会の成果を JHP 研修会受講者・未受講者勤務校の教育実践や意識などを比較・検討することで明らかにする。ここから得られた知見は、カンボジアの幼児・初等教育段階の美術教育はもとより、その他の発展途上国の教育支援にも資するものとなるだろう。

2. 方法

2017年2月13日～17日の日程でスヴァイリエン州5校、プノンペン市内3校の小学校を回り、16人の教員に対して聞き取り調査を実施した。主な質問内容は以下のようなものである。

- ・先生になった理由と理想とする教育像はどのようなものか？
- ・JHPの研修後に教育に対する考えは変わったか？それは具体的にはどのようなことか？
- ・今後のカンボジアの教育で大切にしたいことはどんなことか？

ここで語られたことをもとにライフストーリー研究の視点から整理していく。また、カンボジアの教育の現状と今後について途上国教育支援の専門家や教育省の担当官から得た情報をもとに、民主化後のカンボジア教育の動向も合わせて検討するものである。

また、プレ調査として各校低学年5人ずつにS-HTP(家・木・人物画)法による描画調査を実施し、JHP研修校と非研修校の子供たちの描画について評価・検討した。

3. 結果・考察

ポル・ポトによる暗黒政治の後も長い内線を経てきたカンボジアにとって、1993年の民主化から先ずは国民意識の形成が喫緊の課題となり、「よき人」をナショナル・カリキュラムの中核に据えた。その後、2006年には「よき市民」を掲げ、現在改訂作業中の次期教育課程では「完全な市民(Full Citizen)」が中心に据えられている。

このような大きなカンボジアならではの教育ストーリーがあって、その上に個々の教員のストーリーは成り立っている。それは、小学校教員養成校で指導された子供中心主義の立場は理解しつつも、その具体化された授業像が実体化されておらず、結局は自身が経験してきたであろう伝統的な伝授・伝達型の授業に終始する要因となっている。しかし、例えば JHP の研修受講者には、意識の上でも日々の授業方法の上でも非受講者とは大きな違いが見られた。ただし、プノンペン市内の小学校で外国の直接的な支援や高等教育の機会に恵まれた教員にあっては意識と授業方法は先進的で、改善・向上に対する意欲も高かった。

次期ナショナル・カリキュラムでは、芸術教育(図画工作科や音楽科など)が週1時間の科目として位置づけられることになっている。公的私的問わず研修会の機会がなかったカンボジアにあっては、具体的な授業像を理解するための教員トレーニングが必要となろう。それは、2012-13年の2年間に計4回(12日間)実施されたJHPの研修のように外国の専門家と現地の専門家がチームとなって両方の意識を理解し合った上で進められることが、大きな教育ストーリーと個々の教員のストーリーを接続する上で重要となろう。

現在は JHP の芸術教育普及事業が JICA 草の根事業に採択され、文部科学省とカンボジア教育省の協力の下進められている。今後、飛躍的な美術教育の普及・発展が期待される。

4. 本研究の発表計画等

2017年8月韓国で行われる InSEA2017(国際芸術学会)にて研究発表する予定である。